

内裏造営で壊された古墳

〔1〕はじめに

今回の展示では、長岡宮内裏「東宮」の発掘調査で出土した遺物のうち、古墳時代の資料に焦点をあてて紹介いたします。

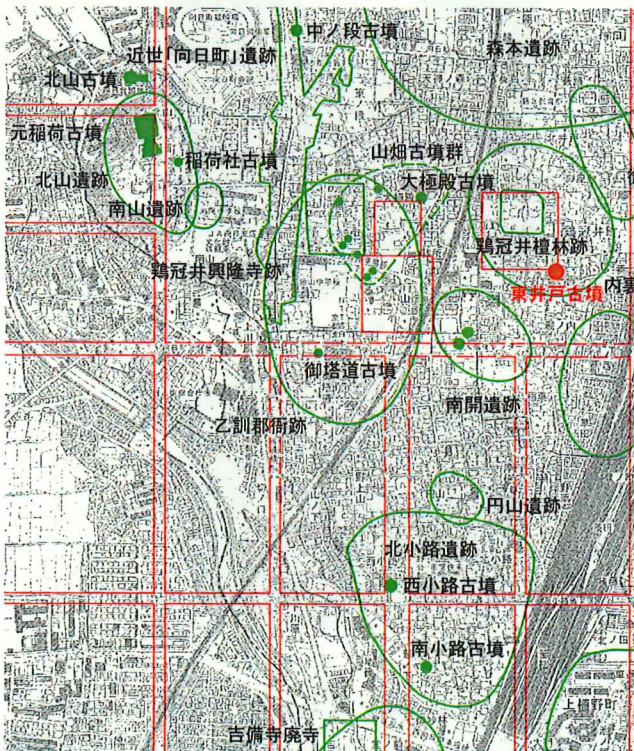
築地回廊の南東隅角付近にあたる「字東井戸」の発掘調査地（長岡宮跡第155・238・245・382・472次）からは、6世紀前葉の円筒埴輪の破片が集中して確認されています。古墳の痕跡は未確認ですが、長岡京造営の時に墳丘を削平していたと見て間違いありません。

向日市内で古墳時代の後期（5世紀後葉～6世紀末）にあたる古墳は、大極殿や朝堂院が造られた場所に山畑古墳群があり、朱雀門付近には西小路古墳、南小路古墳が確認できます。また、内裏の北方約1.8kmの所には、畿内中央豪族の墓である物集女車塚古墳が造られ、現在も前方後円墳の威容を留めています。

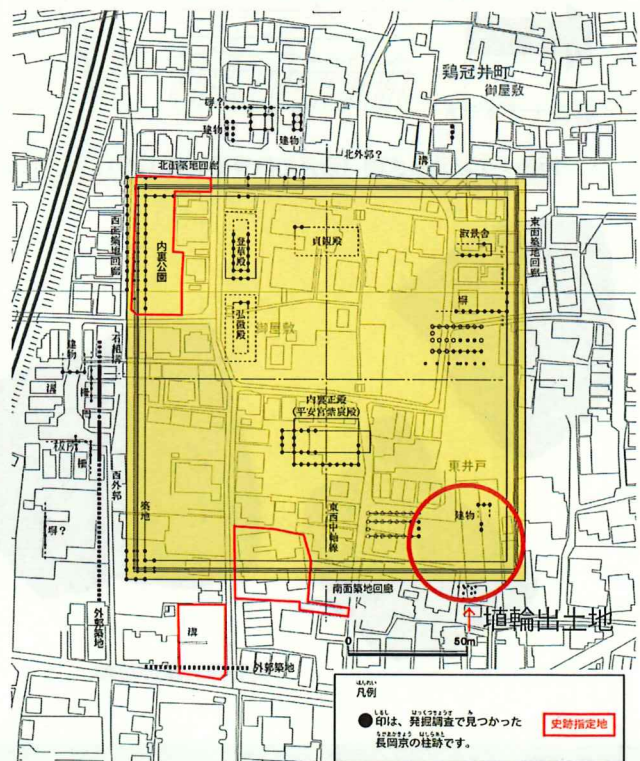
東井戸古墳の埴輪には、物集女車塚古墳と同じ特徴が見られ、その潜在的価値は極めて高いといえます。今回の展示を通じて、長岡京の中枢部が立地する場所が古墳時代から重要視されていたことを知っていただく機会になればと思います。

〔2〕出土埴輪の特徴

鶏冠井町東井戸から出土した埴輪には、普通円筒埴輪が30点ばかり確認できます。円筒部の外面にめぐる突帯は、「断続ナデ技法」によって制作されていました。これは、円筒部に施された3条～5条の突帯のうち、最下段だけを台形に整えず、粘土紐を器面に貼り付けるときに指で断続的に押さえた痕跡そのものにあたります。



東井戸古墳の位置



埴輪の出土地点

突帯の上下側面に指でヨコナデを加えて台形に整える調整工程（断続ナデ技法A）までが、一般的な突帯の製作方法となります。これに対して、最終調整を最下段に限りて省略するつくり方（断続ナデ技法B）があり、ごく一部の埴輪工人たちのあいだで採用されていました。

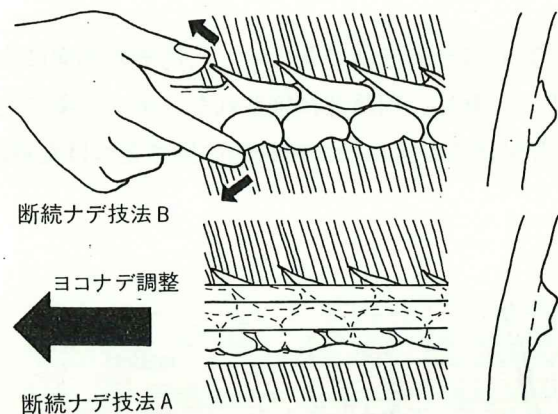
〔3〕埴輪の歴史的意味

「断続ナデ技法B」は、畿内（大和川・淀川水系地域）で生まれ、その後西日本に伝わりました。畿内ではこれまでに河内11、大和8、和泉3、摂津3、播磨1、山城1、紀伊5の総計32基以上の古墳で確認されています。この技法が流行する時期は、6世紀前半にあたり継体天皇が活躍した時代にもあたります。高取町市尾墓山古墳、茨木市南塚古墳、向日市物集女車塚古墳など畿内型石室を有する古墳にも伴うことから、継体政権の一翼を担う有力者の墓に供給されたものが含まれていたのかもしれませんが。

また、堺市平井塚古墳や淀川流域の高槻市昼神車塚古墳、向日市物集女車塚古墳・東井戸古墳など土師氏の本拠地と伝えられる場所にも確認できます。

王権が掌握する埴輪生産組織のなかでも大王墓の造営に直接関わった特定の埴輪工人にだけ許された自らの系譜、いわば「流派」を明示する製作技法であったのではないのでしょうか。

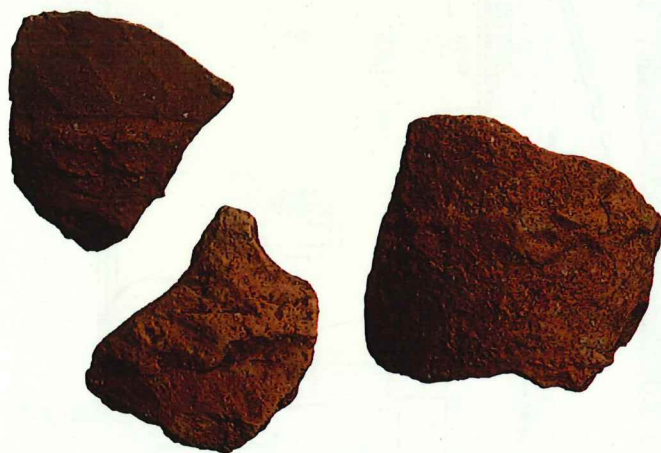
向日市では2例目となる「断続ナデ技法B」をもつ埴輪の発見は、「字東井戸」地内にこうした流派によってつくられた埴輪を樹立した後期古墳があったことを示しています。東井戸古墳との名称を与えうる古墳の被葬者とはどのような人物であったのか、興味が尽きません。



断続ナデ技法模式図（奈良市教育委員会 1991）



物集女車塚古墳の埴輪



東井戸古墳の埴輪



三次元レーザ計測画像（大手前大学史学研究所作成・提供）

令和6年度旧上田家住宅 夏季埋蔵文化財ギャラリー展示解説シート『内裏造営で壊された古墳』

会期 令和6年6月18日～6月30日 会場 旧上田家住宅ギャラリー 主催 向日市文化推進課・公益財団法人向日市埋蔵文化財センター

編集 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター <http://mukoumaibun.or.jp> 発行日 令和6年（2024）6月18日